

# 意味解釈の能力をめぐって<sup>(1)</sup>

菅原光穂

## 1

生成変形文法の意味部門においては、文とか句を意味上変則的 (semantically deviant) なものと決定するメカニズムがあるが、そのメカニズムは、他の文及び句を意味上良型的 (semantically well-formed) だと決定するプロセスと同様、それは自動的な操作であると考えられている。たとえば、bachelor girl という句が意味上良型的なものとして解釈されるには、bachelor と girl の意味融合 (semantic amalgamation) に作用する投影規則 (projection rule) が円滑に操作される必要がある。その円滑さは、理論上 bachelor の側にある選択制限 (selection restriction) と、その制限の直接的対象となっているもう一方の語 (girl) の持つ意味素性 (semantic feature) との関係において説明される。Katz—Fodor (1963), Katz—Postal (1964) によれば、bachelor という語は若干の数の意味を持ち (多義)、そのおのおのが意味系路 (reading path) を形成し、夫々の系路に他の語との選択かつ制限のための特徴を備えていることになっている。従って、bachelor girl が良型的である為には対象語である girl が、bachelor の持つ一つの (或は n 個の——但し、そうなれば bachelor girl は n 通りに意味解釈が可能であるという恣意性を有することとなる) 選択制限と満足な関係を持つことが条件となる。他方、bachelor の持ついかなる選択制限も girl の (たとえば) [female] という意味特性を受け入れない場合、bachelor と girl を融合させる投影規則

(1) 本稿は、日本時事英語学会第 11 回年次大会 (1969 年) でのシンポジウムにおいて提言した内容を基礎にして、それに若干の加筆を施したものである。

は円滑さを欠くことになり、その句の意味の変則性が明らかにされる。

要するに bachelor girl が意味上良型的なのか、それとも変則的なのかは、bachelor の持つ選択制限の様相次第ということになる。(但し、その場合、girl の意味素性は一定なものとして考える。) さて一体如何なる条件下において bachelor に girl との結合を認める選択制限を設定するのか。又その結合を許さないという選択制限の存在をどんな条件の場合に考えたらよいのであろうか。変則的な意味の文、或は良型的な文の解釈を決定するプロセスが如何に自動的に操作されても、その操作のための入力 (Input) として考えられるべき選択制限が理論上問題を包含しているというようなことが考えられはしまいか。そのことを、ここではまず二つの観点から検討してみたい。一つは隠喩 (metaphor) の固定化現象にからむ選択制限の不明確さについてであり、他は辞書の再構成 (reconstruction) と呼ばれているものに関する選択制限の問題である。前者を2の項で、後者を3の項で取りあげてみたい。

## 2

まず、隠喩に関する選択制限についてであるが、Chomsky (1965) も述べているように、意味上変則的な文の多くは場面 (non-linguistic situation) やその他の言語外の情報によって、隠喩的表現として考えられる可能性をもっているものである。たとえば (1) であるが、夫々の文は主語と動詞、及び動詞とその目的語との関係において動詞のもつ選択制限が緩和されている。故に意味的にも変則である。<sup>(2)</sup>

### (1) (i) \*Golf plays John.

(2) Chomsky は *Aspects* で述べている通り、(1)の文はその変則性を統辞部門においてチェック出来る種類の変則性だと考えている。ここではしかし、Katz-Fodor 等が例としてあげている意味上の変則文、たとえば、It smells itchy, などとその変則性の本質に関して相違はないものと考えている。なお、Chomsky の選択制限規則と Katz の主張しているものとの異同に関する諸問題は、稿を改めて論じることにした。

(ii) \*The boy may frighten sincerity.

(iii) \*Misery loves company. (Chomsky: 1965)

しかし、(2)にあげるような良型文への類推から、我々は(1)を隠喩的と考えることも出来るわけである。

(2) (i) John plays golf.

(ii) Sincerity may frighten the boy.

(iii) John loves company. (Chomsky: 1965)

このように、変則文を隠喩的であると解釈できる事実が明らかにする一つの問題は(他にもう一つの重要な問題点を、この事に関して指摘することができるが、それは第4の項でとりあげることにして)隠喩の固定化現象にからむ選択制限の決定についてである。

(1)にあげた *golf plays, plays John, frighten sincerity, misery loves* 等は変則的ではあるが、隠喩的解釈を可能にするものとするれば、しかも

(3) しかし、このような類推が可能なのは、選択制限が動詞にあるという構造に多く見られるものである。たとえば、*Sincerity admires John* において、これが Chomsky の示唆するような隠喩的表現として認められる背景には、*admire* の持つ選択制限 [+Human] \_\_\_\_ を満足させるように、根元的には [-Human] である *sincerity* に [+Human] の特性を持たせる一種の擬人化 (personification) が行なわれるからである。(この擬人化という考え方が正しければ、ここで用いた [ $\alpha$  Human]  $\langle \alpha \rightarrow \pm \rangle$  は統辞素性でなくて、意味素性と見るべきか?) 類推は、従って、同型の良型文 — *SOMEONE admires John* — に作用するものとする。そのことはまさに、*the acid is eating the chain* を *we are eating lunch* からの類推によって受容的 (acceptable) なのだと Katz (1967) が述べていることと同じである。しかし乍ら、動詞中心の構造でない場合は、必ずしもその類推による解釈が妥当だというわけでもなさそうである。たとえば *the bule theory of relativitiy, my false car, brightly large package* などが仮りにも隠喩的、即ち受容性のある表現とするなら、それらは一体どんな良型文を類推作用の対象とするものであろうか。あるいは又、たとえ動詞中心の構造に関しては「類推」作用の余地があると認めても、「類推」そのものは屢々ある特別な関係にある複数個の言語 (あるいは一般的に言って「現象的」) 項目の結果的記述であって、関係そのものを有機的に説明するものではない事を Chomsky 自身が説いていることでもある。こうした観点から、「類推」的解釈を隠喩表現に適用することに問題がないわけではない。

Bickerton (1969) や, Drange (1966) の指摘を待つ迄もなく, 隠喩的表現はその性格上暫定的意味 (temporal assignment of meaning) から固定的意味 (permanent assignment of meaning) へと変化するものであることを考えれば, play の主語に [-animate], 目的語に [+animate] な特性を持つ語を認めるような制限が固定化する可能性が全くないわけではない。発生上 plant はその選択制限が [\_\_\_\_\_ -[abstract]] であったと推測できるが, she planted an idea in his mind に見られる通り, [\_\_\_\_\_ +[abstract]] を現在では容認しなければならない条件も充分にあると思われる。同様に, 形容詞としての iron も, かつてある時期にはそうであったと推測出来るように, [metal] の意味素性によって代表される意味系路しか持ち合わせていないとすれば, そこに認められる選択の制限は極めて大きく, 多分現在の用法にあてはめれば, iron ores, iron tool, iron bar, iron hat, iron sand, iron stone あるいは iron master に相当するものに限られたであろう。その場合, 鉄の帰属概念として考えられ得る [hardness] とか [harshness] に関する用法は隠喩的であったとしても, 意味上の良型的結合ではなかったと言える。それは, 丁度, 現在「鉄」の概念に関する直観的なものと思われる [durability] や [weight] を語の連鎖の制限に持ち込んだようなものである。たとえば, \*iron goods (耐久性) (cf. durable goods) とか \*an iron burden (重さ) (cf. a weighty burden) などは [hardness] 及び [harshness] 同様, 物質としての鉄の特性を考慮した表現とも言えようが, 現在ではそれらの表現はまだ明らかに変則的である。(たとえ, 隠喩的解釈の可能性をもっていたとしても。) しかし乍ら, SOD によれば [hardness], [strength] 等の特性は, すでに17世紀の初頭に, 又 [harshness], [cruelty], [mercilessness] 等は16世紀の終末に, 既に使用され始めている事実が記されていることから明らかのように, iron determination, iron will, iron discipline, iron constitution 及び iron rule, iron hand of fate などの句は隠喩表現の域を脱して, 良型的な語の連鎖になったものと考えてよいであろう。

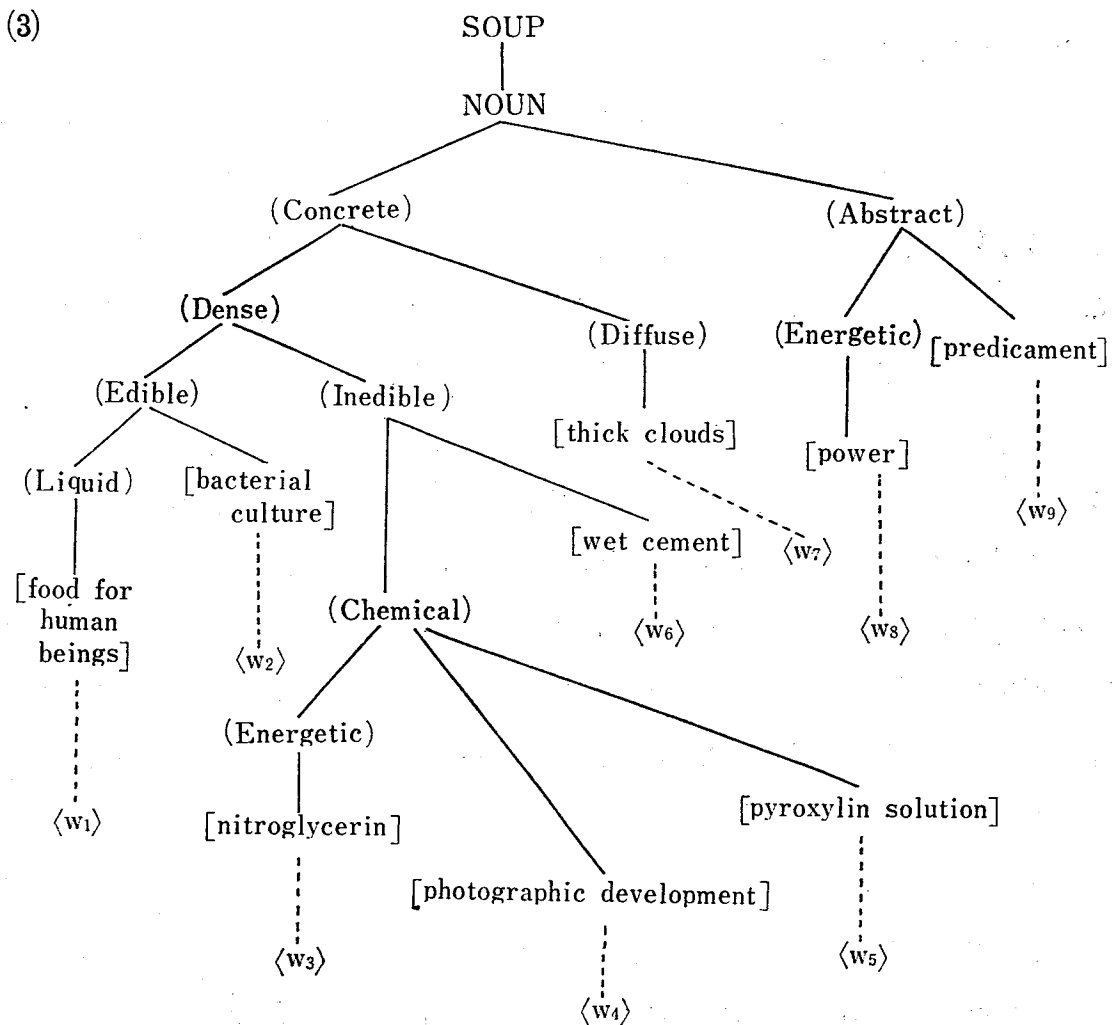
しかし、これまで正確な表現をさけてきたわけであるが、ある一つの句が意味上変則的な——従って、隠喩的な（但し、無条件に変則的な語の連鎖を隠喩表現と等価であると考えているわけではない）——状態から、良型的な結合の範疇へ移行したと考える時、その移行の様相に関する理論的、或は実証的な根拠について問うことをしなくてよいものであろうか。良型的か変則的かは選択制限次第ということであるから、その問題は畢竟、選択制限決定に関する理論にかかわり合いを持つ。確かに、意味のユニバーサルな理論とは別に、特定言語における文の意味解釈の理論においてさえ、選択制限の決定はパーフェクトなネイティブ・スピーカーの能力を想定することによって、アプリアリになされているから、個々の辞書項目の選択制限がどうあらねばならないか、という問題は提起されることがない。その場合、仮りに特定の辞書項目についてある新しい意味的な事実（我々の例では、隠喩の固定化現象）が発生したとしても、それは理論と矛盾することなく受け入れられることになる。しかし、先にも見たように、その事実によって変則性と良型性が明確に区別されるものとしたら、本質的にはその区別は意味の理論上重要な位置を占めていないのではないかと疑わざるを得ない。いや、少くともそういう事になってくる。更に又、選択制限を決定する理論が不明確であれば、たとえば、[degenerated] とか [debased] 等の特性を示唆する iron times は良型的な語連鎖であると説明されても、その良型性が実は iron will, iron determination 等と全く同じレベルで良型的なのではないと感じるネイティブ・スピーカーの能力は意味解釈に持ち込まれないのではなからうか。

## 3

さて、次は同じく選択制限の決定にかかわる問題を共時論的立場から論じていくわけであるが、Katz-Fodor (1963) 及び Katz-Postal (1964) の両方において、選択制限が本質上意味系路に内在するものであるからして、ここでは主として意味系路設定にかかわる問題というように、そのねらいを若

干かえて考えてみたい。

辞書項目の意味として, Katz-Fodor, Katz-Postal があげているところのものは, いわゆるこれ迄の辞書 (以下「伝統的辞書」として「辞書項目」の「辞書」から区別する) の意味項目を基礎として, そこに提示されている多義性<sup>(4)</sup>を中心にして決定されているものである。たとえば, ある一つの辞書項目の有する複数個の意義は, 夫々のもつ意味素性の関係を明らかにする為に, 枝わかれ図で示されるような意味系路を構成する。soup なら, たとえば(3)の如くである。



(4) 辞書項目の多義性と単義性の議論はここではさけない。詳細は Weinreich (1966), McCawley (1968), Katz (1967) を参照されたし。

(3)に示した図は結局、同一項目 *soup* にある諸意義(左端の [food for human beings] から右端の [predicament] に到る)の関係を構造化してみたものである。又、各系路は 'soup' が他の語と意味融合をなすときに作用する投影規則のための構造化であるとも言える ( $\langle w_1 \rangle \dots \langle w_9 \rangle$  はそのとき各系路に付随している選択制限である)。従って、たとえば意味解釈の一つの対象でもある恣意性の解消 (disambiguation) は、辞書項目に示される系路の数にかかわりがある。*soup* の場合、最大限9通りに曖昧で、図3はそれ以上の解釈のないことを示す。勿論、コンテキストによっては、その曖昧さの範囲は限定される。たとえば、(Edible)のコンテキストでは2通りにしか曖昧ではない。意味系路の設定次第によっては、従って、恣意性解消の過程にも大きな影響を与えるわけである。ともあれ、このような意味系路の設定は、伝統的辞書の意味項目を基礎とはしているが、そのままを系路とするのではないという観点から、これを辞書の再構成 (reconstruction) と呼んでいる。

さて、今われわれにとって関心があるのは、その再構成についての原理及び方法なのである。Katz-Fodor, Katz-Postal において例として用いられる *bachelor* は大体多くの辞典に共通して見られる4項目 (① a young knight who follows the banner of another ② a person who has received the lowest degree conferred by a college, university; or professional school ③ an unmarried man ④ a male animal (as a fur seal) without a mate during breeding time) を意味系路として持っているのであるから、それはよいとしても、すべての辞書項目がその意味系路の決定に関して問題を持っていないわけではない。たとえば、*backbone* などではその意味の再構成は一体どうなるものであろうか。まず各辞書にあたって夫々が表記している意味を調べる。出来るだけ多くの辞書に当ることが意味系路決定の条件ではあろうが、今は再構成に関しての問題点を明らかにすることを目的とするのであるから、便宜上ここに三つの辞典を抽出してみたい (無作為抽出)。

## (4) A. Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary on Bilingual Principles

- ① 背骨：脊柱
- ② (山脈の) 脊梁：(書籍の) 背
- ③ 中心的支持力：主力
- ④ 気骨：精神力

## B. The Random House Dictionary of the English Language

- ① *Anat*, the spiral or vertebral column: the spine
- ② something resembling a backbone in appearance, position, or function
- ③ strength of character
- ④ *Bibliog*, The back or bound edge of a book; spine
- (⑤ 及び ⑥ の項は、ここでは省略——ACD 参照)

## C. Webster's Seventh New Collegiate Dictionary

(A Merriam-Webster)

- ① spinal column, spine
- ② a: a chief mountain ridge, range, or system  
b: The foundation or most substantial or sturdiest part of something
- ③ firm and resolute character
- ④ the back of a book usu. lettered with the title and the author's and publisher's names

今、仮りに三つの辞書が夫々独自の意味系路を backbone について作成するものとしたら、内容のかなり異なった三様の意味系路が出来上ることになる。たとえば、辞書Aでは②の「(山脈の) 脊梁」と「(書籍の) 背」が同一の意味系路にまとめられるであろうが、辞書B及びCにおいては②と④の



項目に分割されているから、それらは別々な意味系路となるであろう。又、Aにおいて全く異なる②と③の意味が、Cにおいて②の同一範疇に入れている。但し、そのC②をa及びbについて二つの意味系路に独立させる事も可能である。その場合、Aが4つの系路を持つのに対してCは5つの意味系路という差が生じてくるだけである。

このように三者三様の意義関係を示してはいるが、それらを整理して辞書A, B, Cに共通な意味系路の決定も考えられないわけでもない。それにはまず第一に、解剖学的な意味をもつ各組の①はそのまま一つの意味系路を構成するものとする。第二に、Aにおいて「気骨」「精神力」との二つの項目を④に並列させているが、両者は明らかに *he lacks backbone* (彼には気骨(又は精神力)がない)のコンテキストにも示されるように示唆的な対立をなしてはいない。Aにおけるこの④の項目と、B及びCにおける③——つまり「性格」に関する特徴——とをまとめて第2の意味系路とする。さて次のAの③であるが、これは上にもものべた通り *a main support* という事で、「中心的支持力」と「主力」の間にはやはり大きな恣意的可能性があるとは思えない。これをCの②(b)及びSOD (*The Shorter Oxford English Dictionary*)の(2)に見られる意味系路としたい。これが第3の系路である。Aに関しては、これまで①, ③, ④の夫々の項目内における対立は恣意性を生起させるものではないとして独立の意味系路を認めることはしなかった。しかし、残る②に関してはどうであろう。明白にその指示物を異にする「山脈の脊梁」と「書籍の背」とでも同一意味系路にはめ込むことが出来るであろうか。確かに、山脈に関する事と書籍に関する事とは指示物を異にするが、この両者は同一コンテキストにおいて対立はしない。しかも、辞書Bの②に表示されている概念は書籍の背と山脈の脊梁を包含するものでもある。(もし、そうなら、Randomが④を②から区別した基準を検討する必要があるように思うが……) こうなれば辞書Aのように一つにまとめて単一の意味系路を与えることが可能になる。この両者に差があるとし

ても、その差は文脈的、場面的なものであるから恣意性という面に関しては問題はない。さらに、その中の‘function’の項目としてA ③、C ②(b)を包含することが考えられる。かくして、(5)のような三つの意義に代表される意味系路を設定することが出来る。

- (5) backbone: ① spinal column: spine  
 ② firm & resolute character  
 ③ something resembling a backbone in appearance, position, or function

夫々は ① 生理学的意味、② 性格の特質、③ 脊柱の機能（たとえば、「支持力」）、脊柱の存在する場所（たとえば、「本の背」）、それに脊柱の形（たとえば、「山脈の脊梁」）を示す意味特徴から成り立つと考えればよい。

さて、これ迄論じてきた意味系路設定の手法は一口で言えば、(4)におけるB ②の中にA ③、C ②(b)をくみ込んだ、いわば概念の類似性を根拠にしたものである。この手法でいけば、必ずしも意味系路が三つに限定されるわけでもない。類似性の基準を拡大して概念の総合をはかれば、しまいには、たとえば、(6)のような意味系路一本にまとめることも可能となる。

- (6) backbone: 「ものの支え」

これはまさに、backboneの「意義素」にも相当するようなものである。従って、意味解釈の一つの狙いである恣意性の解消という事も、一見意味系路が一本であるならば不可能であるよう思えるが、それも辞書Aに示されるような対立のレベルにおいてではなく、(6)の意味に示唆されているように、非常に抽象性の高いレベルにおいてであるから、その限りでは問題はない。意味系路が一本である場合の選択制限も、「ものの支え」程度の抽象化した意味を保持するには、かなり包括的なものとなるが、制限そのものは複雑ではなくなる。しかし、こうした意義素的意味系路の設定が意味の能力とどう

かかわり合いを持つのか検討する必要があると思うが、それについては改めて論じることにはしたい。

むしろ、(6)の backbone 意味系路一本説を別の角度から考えてみることにする。たとえば、backbone の意味系路を(5)における①に限定し、②及び③は副次的な「記号 — 指示物」の階層関係(菅原：1967)を構成するものとする。すると意味系路は、

(7) backbone : 「脊柱, 背骨」

である。この場合、(8)にのべる(i)―(v)のすべては、解剖学上の「脊柱, 背骨」ではないが、それらの適切な解釈は、「backbone(記号) — 脊柱(指示物)」を第一次的指示関係として、それからの派生的意味解釈である。そう考えることによって(8)の(i)―(v)に示されるような、まさに数に限定のない backbone のコンテクストとその解釈が可能になるわけである。

- (8) (i) Young people are the *backbone* of a country.  
 (ii) The backbone of a defence  
 (iii) a liberalist to the *backbone*  
 (iv) to give the *backbone* to the party  
 (v) to strain one's *backbone* through farm work

この場合、いわゆる「派生的解釈」を意味能力(semantic competence)に含むかどうかを決定しなくても、少なくとも、その「解釈力」を辞書項目の意味系路と直接的な関係におかなくても良いように思われる。つまり、「脊柱」という第一次的指示作用をどのようにして副次的解釈へと発展させるかの問題であるから、そのプロセスは意味系路に具体化されている必要はないと考える。それは別の能力として、たとえば、運用能力(performance)の部分であるとしても考えたらどうであろうか。要するに、(6)のような概念の抽象化的方向ではなく、概念の階層化という方向で(7)のように意味系路を

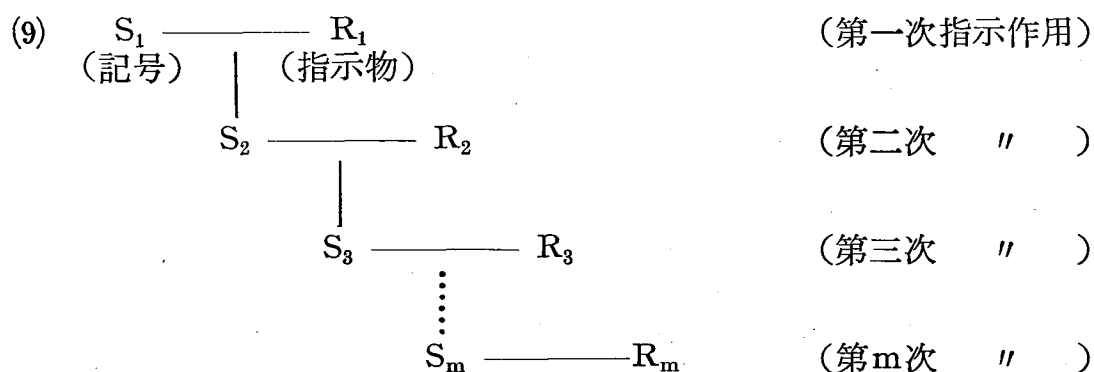
一本にまとめることが出来るわけである。

## 4

backbone の意味系路は、以上でわかったように (5), (6), (7) と少なくとも三つの異った設定がなされた。bachelor girl の例を用いて本稿の始めに論じたように、(5), (7) ((6) は一応論義の対象外としておく) のいずれをとるかによって、同一文 (意味的にも構造的にも恣意的でない一つの語連鎖) を変則的であると決定したり、又逆にそれを良型的だと決める事が可能になる。たとえば、(5) のように 3 本の意味系路から成る辞書項目を考えるなら、(8) の (i) — (v) は (5) の ② か ③ に付加されている 選択制限によって良型的と判定される。一方、backbone の意味系路を (7) のようであるとすれば、解剖学的な「脊柱」という概念を持たない使用法の一切は、理論上選択制限の緩和、即ち意味上の変則文とみなされる。このように、(5) 及び (7) に示唆される意味系路設定の基本的相違は、一方において良型的である文が、他方では変則的であると解釈される点にある。これを言語に関する能力として見るなら、意味上良型性と変則性を区別する能力は同一で、これを今「意味能力」(semantic competence) とする。この場合、その意味能力は、(7) によって変則的とされはしたが明らかに (8) の文を隠喩的表現として受容性のあるものだと判断する能力 から区別されなければならない。同一要素から成り、しかも意味的にも構造的にも恣意性を有しない一つの語連鎖を、一方では肯定し、他方では否定するような能力を考えることが出来ないからである。私の見解では、変則文を受容性のある隠喩表現であるとする解釈は、言語内情報ではなく言語外の実在の世界からの情報に基礎を置くものとみなすことができるから、その解釈はいわゆる運用能力 (performance) の一部となる。

隠喩表現が言語外の情報に基礎を置くという主張は意味の記号論的階層分析 (菅原, 1967) によれば次のように説明される。今ここに明らかに変則的な句 'a blue theory of relativity' があったとする。この句がもし隠喩表現

として認められるなら, それは決して blue のもつ意味系路の一つと theory のもつ意味系路との融合ではない。即ち, 夫々の語が記号として第一義的に指示するものが互いに結合するのではない。もっと一般的な言い方をすれば, blue theory に隠喩的受容性を認める場合, それは blue 及び theory が夫々の第一次指示作用のレベルで結合されているのではない。第一次指示

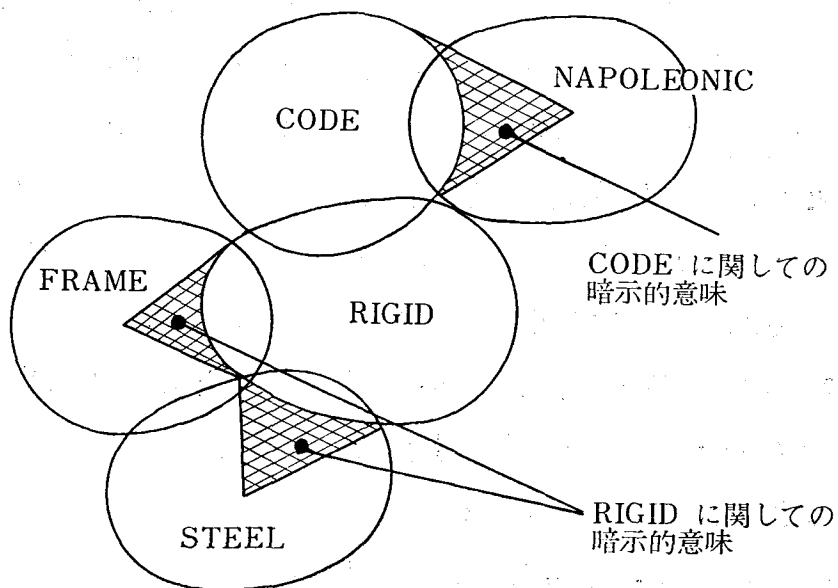


作用では, 'blue' は 'あお' を, 'theory' は '理論' を夫々指示物としてとるからである。blue theory が意味的に変則なのはこの第一次レベルにおいてである。このレベルは明らかに意味能力の領域であろう。blue も theory も共に, 独自に第一次作用を基礎レベルとして順次に派生する指示物を持つわけであるから, 今虚構的ではあるがその第 m 次指示作用での両者の融合ということを考えてみる。隠喩的表現が成立するのは, その場合 blue の第 m 次のレベルにおける  $R_m$  と theory の同じレベルでの  $R'_m$  とが有意味的と感ずることが条件である。しかし, 隠喩表現の性格上, 必ずしも相互主観的な解釈がなされないのは, 意味の受容的な結合が常に  $R_m$  と  $R'_m$  の間でなされるのではなく, 個人によっては, …… ( $R_{m-2}$ ) と  $R'_m$  との間で blue theory が有意味的であったりすることも考えられるからである。その事をより一般的な形で表現すれば, 有意味的 (この場合は隠喩的) である条件はさまざま, …… ( $R_{m-2}$ )— $R'_m$ , ( $R_{m-1}$ )— $R'_m$  …… ( $R_{m+1}$ )— $R'_m$ , ( $R_{m+2}$ )— $R'_m$  …… もあれば, 又  $R_m$ —( $R'_{m-2}$ ),  $R_m$ —( $R'_{m-1}$ ), ……  $R_m$ —( $R'_{m+1}$ ),  $R_m$ —( $R'_{m+2}$ ) …… 等も考えられる。要するに ( $R_{m \pm n}$ )—

( $R'_{m\pm n}$ ) ( $m, n \geq 0$ ) の数だけ可能ということになる。つまり、blue と theory の融合の可能性はこの場合無限である。しかしそこに何らかの相互主観性を見るものとすれば、明らかに脈絡の作用と考えたい。脈絡そのものは言語外の情報であり、かつ  $R_m$  及び  $R'_m$  ( $m > 1$ ) も極めて個人的色彩の強い指示物であるとすれば、隠喩表現の解釈が言語外の情報にもとづくものであることは明らかである。第2の項で取りあげたように iron will, iron discipline 等が隠喩の性格を失ったものとすれば、( $R_{m\pm n}$ )-( $R'_{m\pm n}$ ) において、 $m$  と  $n$  に限定が加えられ、しまいには  $m \pm n$  が 1 に近づいた現象であると考えられる。つまり、辞書項目の意味系路の中にはめ込まれて行く現象である。

階層論とは別に、隠喩表現が言語外の情報による解釈であることは、Joos (1953) のコロケーション理論においても見られることである。Joos は rigid code という語連鎖が第一次指示作用での意味融合以外に、他にある種の付随的な意味をもたらすと述べている。それは rigid に code 以外の語と結合 (図 (10) 参照) することによってもたらされる意味 (第二次以上の指示作用の指示物) があり、他方 code にも、たとえば Napoleonic のような語と結びつくことによって code の有する意味 (やはり第二次以上のレベルで) があ

(10)



(Joos: 1958)

り、従って、rigid code の結合は第一次レベルでの意味とは別に派生的なニューアンスみたいなものを生みだす。前者を intentional meaning であると言え、後者はまさに connotational なものであろう。この理論が、blue theory のように変則的な連鎖においても適用され、そこに内包的意味に相当するものが生じそれが隠喩的解釈を可能にしているものと思える。全く内包的意味でも幾分かは相互主観性をに成るのは、先にも触れたように脈絡によるものと考えたい。

小論の始めに例として用いた bachelor girl のような連鎖は、今論じたような Joos の連語 (Collocation) 論的にも、又階層論的にも説明できるが、ここでその例をとりあげ別の問題を論じてみたい。bachelor girl ははじめにも述べた通り、[-male] の意味素性を bachelor の系路に設けるのでなければ、その連鎖は変則的だと看做される。その場合でも隠喩的なものとして受容性のある解釈が認められるならば、それは Bickerton (1969) の主張にあるように、決して新しい素性として [-male] を系路に設けるのではなく、それは辞書構造における意味の技わかれ図に示されている上部構造に位置する [+male] が下部構造の [+single] に圧倒されて起る現象かも知れない。しかし、Bickerton 自身はこの現象を意味能力によるものと考えているらしい。意味能力とするためには、それが固定的現象——つまり意味系路の新設——だと考えるのでなければいけない。むしろ、Bickerton の説明は一時的でかつ現象的な面についてのべているものと受けとるべきであろう。Bickerton のいう bachelor の意味標識 (semantic marker) の移動は明らかに後続する girl の誘引と考えたい。つまり、girl の前においてのみ起る特異現象であって、意味系路の新設ではない。bachelor girl の解釈は純粋な意味能力というよりは、脈絡とか場面の情報を解釈に適用する運用能力によるものとすべきである。

こうした解釈能力は、外山氏 (1968) がキーツからの引用としてあげている *this pious morn* とか *in some melodious plot* にも適用可能と思われる。

氏は *pious* と *morn* に、又 *melodious* と *plot* に「圧力の条件」なるものを設定してユニットが一つ一つばらばらにならないような力が、そこに働いていると説明している。それを「表現空間」と外山氏は述べておられるが、それはまさに脈絡に示唆される言語外場面の情報の「場」であるといえよう。明らかに変則的な結合である *pious morn* も解釈上 [[[敬けんな] [気持の]] [朝]] と考えることによって受容的となる。

以上この第4項において眺めて来たように、変則的ではあるが隠喩的表現として認められる解釈は、Chomsky の示唆にもある擬人化 (*personification*) とか、外山氏の表現空間化等の結合構造による型の他に、階層的、連語的、あるいは場面や脈絡による解釈まで多様ではあるが、通じて厳密に区別されるべきは、これらを解釈する能力と、Katz-Fodor-Postal の述べる意味能力との間においてである。

## 5

Katz-Fodor-Postal は、われわれがこれ迄論じてきたような問題には触れていない。しかし、かれらの主張に従うなら、当然意味の変則性を指摘し、かつ意味解釈をする力があって、それを意味能力 (*competence*) の範疇内として考え、しかもその能力は変則性を受容的と認めるもう一つの能力から区別される必要がある筈である。意味上変則的な文を解釈する能力をここでは運用能力の一部ではないかと思った。しかるに、*competence* と *performance* の区別は、(5) と (7) で見たような辞書項目の意味系路次第によるものとすれば、問題は大きい。同じ文について、(5) の意味系路を用いればそれは *competence* による解釈となり、(7) の系路では *performance* による解釈と考えなければならないからである。理論上の定義とは別に、このように辞書項目次第で *competence* と *performance* の作用する範疇が重複するという事実は、まさに *competence* と *performance* の決定が辞書項目とは関係のない他の理論によるべき事を示唆している。さもなければ両者の厳密な区



別は保持されない。

さて、その理論は直接資料から辞書項目を決定し competence の範疇を決めるものではなく、たとえば或る手続きによって決定された (5)―(7) について、そのいずれがベターであるかを定めるものである。ちなみに、Katz-Fodor-Postal の理論では、(5)、(7) のいずれでも意味解釈のプロセスには不都合はなく、従ってその理論では両者の妥当性を俄に決定し難い。ある理論 A があって、仮にそれが (5)―(7) から一つを選定し、それをベストなものとして評価したとする。その場合、その評価の妥当性は選定の基盤である (5)―(7) の限定枠が必要にして十分なものであることを証明していなければならない。もし、その限定枠が (5)―(7) では十分でない場合、理論は (5)―(7) 以外にベストなものの存在を予知しなければならない。その場合 (5)―(7) から選定したベストは暫定的であって、恒常的であることはない。従って、そこには常に新しい資料の開発が望まれねばならない。Weinreich (1966) が、

..... the most urgent need in semantics is for fresh empirical evidence obtained by painstaking study of concrete lexical data (p.473).

とのべたのは、まさにその事を示唆しているものと受けとるべきである。

### <References>

- Antal, László. *Questions of Meaning*. The Hague: Mouton & Co., 1963.
- \_\_\_\_\_. *Content, Meaning and Understanding*. The Hague: Mouton & Co., 1964.
- Bickerton, Derek. "Prolegomena to a Linguistic Theory of Metaphor," *Foundations of Language*. 1969, 1, 34-52.
- Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: M.I.T. Press, 1965.
- Drange, Theodore. *Type Crossing*. The Hague: Mouton & Co., 1966.

- Katz, Jerrold, J. "Recent Issues in Semantic Theory," *Foundations of Language*. 1967, 2. 124-194.
- \_\_\_\_\_. "Semi-sentences," *The Structure of Language*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1964.
- Katz, Jerrold, J. & Jerry A. Fodor. "The Structure of a Semantic Theory," *The Structure of Language*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1964. (*Language*, 1963)
- Katz, Jerrold, & Paul M. Postal. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge: M.I.T. Press, 1965.
- McCawley, James D. "The Role of Semantics in a Grammar," *Universals in Linguistic Theory*, Bach & Harms eds. New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1968.
- 菅原光穂. "László Antal の記号論的意味について——その批判を中心に——"  
北海道教育大学紀要. 1967, 1, 36-48.
- 外山滋比古. 修辞的残像. 東京: みすず書房, 1968.
- Weinreich, Uriel. "Explorations in Semantic Theory," *Current Trends in Linguistics*, T. A. Sebeok ed. Vol. III. The Hague Mouton & Co., 1966.